時々クトゥルフのほのぼの日常

悠はる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悠人の日常を書いた物語

ごく稀にシナリオのリプレイ

目　次

そこは、日常ではなかった ―――― 1

そこは、日常ではなかった

部活から帰っていると目の前に黒いフードの人物がいた。
少し恐怖を感じていた。恐る恐る、
「どうかしましたか？」
俺がそう言うとその人物はフードを取り始めた。
直後、目の前が真っ暗になった。

目が覚めるとそこは1本の道だった。
「なんだ，，此処，，」
そこは今までいた道路のような場所ではなく、コンクリートの壁に囲まれていた。そして前と後ろに先が見えないほどの道が続いていた。
（とりあえず前に進んでみるか，，）
壁づたいに歩いていた。すると、２０㎝程の鳥が飛んでいるのが見えた。
（何でこんなところに鳥がいるんだ？）
鳥＜ピョイピョイ
（あ～可愛いな～）
鳥に気を取られ、なにかに躓きコケてしまった。
「ファ!?」
地面にダイブッ！
鳥＜ピョイピョイピョイ
心なしか鳥が俺を見て笑っているような気がした。
「おい、笑ってんじゃねー」
そして、俺の周りを飛び回っていた。
（なんだこいつ何でこんなに俺の周りにくるんだ？）
そして、目の前に柱のような物があった。
「なんだこれ？」
立ち上がりそれを良く見ようとすると、

鳥<ピョイピョイ
とさっきの鳥が柱のような物の上に止まっていた。
しかし、柱のような物より高いところに止まっていることから、そこに何かがあることがわかる。
そこで、俺は手を伸ばしその何かを取ろうとしたら
鳥<ピョイ
と手を突かれた。
「イテッ、こいつめぇ」
鳥は何か勝ち誇ったようにこっちを見ていた。
「お前がその気なら俺だってお前から盗ってやる」
俺は鳥の下にある物を狙って集中し始めた。
フッ、と言う息づかいと共に何かをかっさらった
鳥<ピョーィ
「うっし、盗ったから俺の勝ちだな」
それは、陶器のようなものだった。
「なんだこれ?俺あんまこう言うの知らねぇんだよな〜」
鳥<ピョイピョイ
「お前、なに言ってるかわからねぇよ」
と笑っていた。
「さて、とりあえずどうするかな〜?」
（このまま前に進むか後ろにも道があったんだよな〜）
「よし、後ろにいってみるか」
それを聞いた、鳥は
鳥<ピョーイピョーイ
と暴れ始めた。
「おい、どうしたんだよ」
鳥はピョイピョイと鳴き、前に飛んでいった。
「おい、待てよ〜」
俺は鳥を追いかけて行った。
鳥を追いかけていくと、足元が滑りやすくなっており転んでしまった。

「イッテ、今日全然ついてねぇな」
そして、床を見てみると先程のコンクリートとは違いヌメッとしていた。
鳥<ピョイピョイ
「おい、お前急いで進むぞ」
鳥<ピョーイ
俺たちは凄い速さで走って（飛んで）行った
すると目の前に扉があった。その扉からは光が射していた。
「扉だ、早く出るぞ」
俺は、走っている勢いのまま前に押した。
扉に激突した。
「イッテー、本当に今日ついてねぇなぁ」
扉を引いて外に出た。
そこは大きな森の中だった。後ろを向いて見るとそこには何もなく本日三度目の恐怖だった。
あれから数日後、あのときの鳥とは一緒に住んでいる
ゲートと名付け、可愛がっている
最近ゲートの言葉がわかるようになってきた。
「何でお前と話せるんだ?」
するとゲートは笑っていた。